

宇光輝人

vol.57

繁栄した港町 松合

不知火町松合は「まっちゃん」と呼ばれ、江戸末期から明治中期にかけて、醸造と漁業で栄えた港町。架設200周年を迎えた目鑑橋の松合橋は松合の豊富な資金と人脈を使って、当時の最高の技術を駆使したもの。何の補強もなしに車を通す石橋は、他に類を見ない。今に伝わる「松合千軒」「出船千艘・入船千百艘」といった言葉が、往時の繁栄をしのばせる。

地域のために立ちあがる

肥後随一の漁港として栄えた松合も明治以降、漁獲量の減少から

主産業を醤油の醸造などに変えていく。時代の流れと共に、少しずつ町のにぎわいが失われていった。

平成4年、そんな地元のために何かできないかと有志が集い、始まったのが「まっちゃん活かそう会」。会の立ち上げから関わる坂本順三さんは「最初は何かから手をつけていいか分かりませんでした。だから、いろんな所に視察に行き、朝市をやることにしたんです。」と話す。

地元でとれた鮮魚、エビ入りのだご汁、後には松合食品のみそ詰め放題が人を呼び、朝市はにぎわい、本通りを多くの人が埋め尽くした。地元の高齢者たちは「昔の

まっちゃんに戻ったごたる」と大喜びしてくれた。

その後もハゼ釣り大会や土蔵白壁の親子スケッチ大会などのイベントに加え、松合の町並み保存会と協力し土蔵白壁の整備に取り組む。平成9年には景観形成住民協定地区に指定され、平成14年には「美しいまちなみ優秀賞」を受賞するなど活躍の場を広げていった。しかし結成から28年、会員の高齢化と人手不足から、やりたい活動もできにくくなってきた。

不知火の「火」を消さない

昨年4月以降、新型コロナウイルスの影響で朝市は中断。大きな転機を迎

える中、萩原洋一会長はこう語る。「これまで、会員がのぼせもんになって精いっぱい活動してきましたが、時代が変わってきたのかもしれません。でもまだやれると思います。会や朝市にも新しい人に加わってもらって、もう一度松合を盛り上げていきます。」

朝市再開のため、松合食品や地元の若い農家2人と組んで申請したGo To商店街事業に採択された。初の夜市も計画している。713(和銅6)年創建、永尾神社には旧暦の8月1日の夜、神秘の火「不知火」が今もなお現れる。まっちゃんに灯る不知火の火は、まだ消えていない。



後列左から 西浦将史さん 坂本順三さん 千葉崎達さん 福本千由美さん
前列左から 浦中政春さん 萩原洋一会長 浦本千晶さん



1. 火事が多かった松合では、火に対する備えとして土蔵白壁造りが増えた 2. 朝市には遠く阿蘇や菊池などからも常連客が訪れる 3. みその詰め放題では10数*詰めめる人もいるそう

まっちゃん活かそう会

Matcha ikasoukai

平成4年、松合地区の地域おこしを目指し結成。会員17人。毎月第3日曜日に開催する「まっちゃん朝市」をはじめ、地区の活性化に取り組む。Go To商店街事業を活用した朝市再開に向け、出店者や新規会員も募集。 岡 坂本 ☎ 42-2003